

## 鎌倉の桜の名所をめぐる

本日のコース(約7キロ)

北鎌倉駅円覚寺側出口(9:30)→円覚寺→東慶寺→浄智寺→葛原岡神社 →源氏山公園→  
化粧坂(切通し)→海蔵寺→鶴岡八幡宮 →段蔓→(13:00)

---

### ・円覚寺 臨済宗円覚寺派，鎌倉五山第二位

8代執権北条時宗は、文永の役(1274年)及び弘安の役(1281年)の二度にわたる元との戦いで死んだ兵士を弔うため宋の禅僧・無学祖元を開山に招いて円覚寺を1282年に創建した。  
寺名の由来は起工の際に、地中から「円覚経」を収めた石櫃が掘り起こされたことによる。  
境内は、山門、仏殿、方丈などがほぼ直線的に並ぶ宋の禅寺様式。  
塔頭 仏日庵は北条時宗の廟所。塔頭 正統院に建つのが鎌倉唯一の国宝の建築舍利殿で、鎌倉尼五山第一位だった大平寺(廃寺)の仏殿を移築したもの。  
参道から外れが鐘楼には1301年、9代執権北条貞時が寄進した国宝の洪鐘(おおがね)がある。

### ・東慶寺 臨済宗円覚寺派

9代執権北条貞時が母の覚山尼(北条時宗の妻)を開山として弘安2年(1285)に創建した。  
“縁切り寺”“駆け込み寺”の名で広く知られる。かつては尼寺として栄え、三年修行すれば離縁できる「縁切寺法」で多くの女性を救った。明治4年(1871)に廃止されるまで約600年にわたり受け継がれた。明治36年(1903)には、尼寺から臨済宗円覚寺派の寺となった。  
後醍醐天皇の皇女であった五世用堂尼(ようどうに)以来栄え「松ヶ岡御所」とも呼ばれ室町時代には鎌倉尼五山第二位に列せられた。  
20世天秀尼は豊臣秀頼の娘で、徳川家康の孫娘・千姫の養女でもあったため、江戸時代には徳川家の厚い庇護を受けた。境内は梅や花菖蒲、アジサイ、リンドウなどが四季折々の花が咲き競う。参道の傍らの黒堀には彼岸桜がほかの桜よりひと足先に、小振りな花を咲かせる。

### ・浄智寺 臨済宗円覚寺派，鎌倉五山第四位

10代執権北条師時(もろとき)が、父宗政(北条時頼の三男)の菩提を弔うため、開山として南洲宏海を招いて、弘安4年(1281)に創建した。その際に、南洲宏海は、師にあたる大休正念と兀庵普寧(ごったんふねい)に譲ったことで、開山者は3人の名を連ねている。  
総門の近くの小さな石橋のたもとに、鎌倉十井(じゅっせい)の一つ「甘露の井」が残っている。  
すり減った鎌倉石のゆるやかな階段を登ると、2階に花頭窓のある唐様の鐘楼門がある。  
本堂・曇華殿(どんげでん)に安置されている過去、現在、未来を意味する阿弥陀、釈迦、弥勒の木造三世仏は、県重要文化財に指定されている。境内に市指定天然記念物のビャクシンとタチヒガン桜がある。その他にも鎌倉一の大きさを誇るコウヤマキがある。

### ・葛原岡神社 由比ヶ浜の鎮守

明治20年(1887)、日野俊基を祭神に創建された。日野俊基は後醍醐天皇に仕えた朝臣。討幕計画に参加し、一度は赦されたが(正中の変)、元弘二年(1332)に再び計画が発覚し、葛原ヶ岡で斬首された。そのときの辞世の句「秋をまたで葛原岡に消ゆる身の露のうらみや世に残らん」  
境内には俊基の墓とされる宝篋印塔があり、国史跡に指定されている。

## ・源氏山公園

後三年の役(1083～1087年)で源義家が奥羽(東北地方)に向かうとき、この山に源氏の白旗を立てて戦勝を祈願したという伝説から、源氏山とか旗立山といわれるようになったといわれる。この源氏山を切り開き、桜や紅葉が美しい自然公園となったのは、昭和40年(1965)のことである。中央広場に治承4年(1180)鎌倉に入ったころの若い頼朝の像が立っている。頼朝が鎌倉に入りしてから800年の記念事業の一つとして昭和55年(1980)に建てられた。

## ・化粧坂(けわいざか)

鎌倉七切通の一つで、今も昔の面影を残し、国の史跡になっている。この坂の名の起こりは、平家の大將の首をここで化粧して首実検した、また、この坂あたりに町家があって化粧をした女たちがいたからとか、木がよく生い茂っていたので「木生え」と呼ばれたことからきているともいわれている。この険しい坂道は、藤沢から武蔵方面に通じる重要な道で、新田義貞が元弘3年(1333)5月、鎌倉攻めのとき、軍の主力を向けたので激戦地となった。

## ・海蔵寺 臨済宗建長寺派

鎌倉公方足利氏満の命を受け上杉氏定が心昭空外(源翁げんのう禅師)を開山とし応永元年(1394)に創建した。仏前に安置されている薬師如来像は、別名啼薬師、児護薬師と呼んでいる。あるとき、寺の裏から毎夜聞こえてくる悲しげな赤ん坊の泣き声を源翁禅師がたどってゆくと金色の光と甘い香りが漂う古い墓があった。経を読みながら掘ってみると、中から薬師様のお顔が現れた。これを新たに作った薬師像の胎内に納めたという(胎内の像を拝観できるのは61年に1回ととされえている)。門前には、鎌倉十井のひとつ、「底脱ノ井」、境内左手のやぐらの中に16の穴が掘られた「十六ノ井」がある。ハギ、ユキヤナギ、カイドウ、ツツジ、ヤマブキ、ハナショウブなど鎌倉有数の花の寺である。

## ・鶴岡八幡宮 祭神 本宮(応神天皇、比売神、神功皇后)、若宮(仁徳天皇、履仲天皇、仲媛命、いわのひめみこと盤之媛命)

鶴岡八幡宮の歴史は、前九年の役で勝利した源頼義が1063年に鎌倉由比郷に由比若宮(元八幡)を創建したことから始まる。1081年には子の義家が由比若宮を修復、1180年、鎌倉入りを果たした源頼朝は、新たに社殿を造営して小林郷松が岡に遷座し、鶴岡若宮と称した。1191年3月の大火で鶴岡若宮は焼け落ちたため、頼朝は早速再建に取り掛かり、大臣山の中腹に本宮(上宮)を新たに造り、若宮(下宮)も再建され、鶴岡八幡宮は現在のような上下宮の姿となった。舞殿が新造されたのは、1193年のことである。昔は、神と仏と一緒に祀られて、薬師堂、多宝塔、仁王門、二十五坊なども造られ、明治までは鶴岡八幡宮寺と呼ばれた。現在の本宮は文政11年(1828)、江戸幕府11代将軍徳川家斉に、若宮は寛永元年(1624)に2代将軍徳川秀忠に修復造営された。源氏池のほとりには、約350本の桜が咲きそろう。

## ・段蔓(だんかずら) 県指定史跡

社前から由比ヶ浜海岸まで伸びる若宮大路は、中央に段蔓と呼ばれる一段高くした道がある。これは、源頼朝の命によって御台所・政子の安産祈願のために養和2年(1182)に造られた参道である。当時のものは、土を盛り上げた上にふちとりの「かつら石」を置いた程度であったといわれる。今でも段蔓付近の地名を「置き石」と呼んでいる。段蔓と呼ばれるようになったのは、江戸時代以降のことで、江戸時代末には現在の下馬四つ角までとなり、明治22年(1889)の横須賀線の開通で二の鳥居から鶴岡八幡宮前の三の鳥居までになった。大正時代に両側に桜を植えて、現在のような参道に整えられた。